

JAELE Newsletter

上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

May 14, 2018

No. 18

退職を迎えて

元上越英語教育学会会長
上越教育大学特任教授 北條礼子

学会員の皆様、こんにちは。今日は退職のごあいさつを申し上げます。

昭和62年7月に助手として本学に就職し、30年以上本学でお世話になりましたが、この3月に定年退職を迎えました。在職期間中、皆様には大変お世話になりましたが、まず心より御礼を申し上げます。4月から特任教授として、本学であと数年お世話になることになりました。本年度は英語コースの所属ですが、次年度からは修士課程の国際理解・日本語教育の所属になります。新しいことが好きなので、正直ワクワクしています。

昨今の頃は、正直なところいつの間にか定年退職の年齢になってしまったのだろうと、自分でも信じられない気持ちでいっぱいでした。考えてみると、はじめは英語教育が専門でしたが、小学校の現職の先生をゼミ生としてお迎えした時から小学校英語とのご縁ができ、そのおもしろさに惹かれ、退職までの期間は小学校英語を中心に担当することになりました。ここからアジア諸国や東欧の小学校英語教育の授業参観をするようになり、異文化理解教育にも関心が広がり、退職後の次年度からはそちらの分野の担当することになったのですから、不思議な気が致します。在職期間中、人並みに大変なことがなかったとは言いませんが、今思うと楽しかった、ここで働けて良かったという気持ちが強いです。

私のこれまでを振り返りますと、まず、英語教育を専門としていた頃には英語の授業における生徒の不安、動機づけにはじまり、英語学習の際の学習方略に関心が移り、さらに教授ツール、評価ツールとしてのポートフォリオの英語教育への適用可能性に関心が移りました。小学校英語の担当をすることになってからは、小学校英語を担当する教員養成のための教授ツールとしてもポートフォリオが大変役に立ちました。ここ10年程、本学の附属幼稚園、附属小学校に私のゼミ生が中心となり英語の出張授業に行かせていただきましたが、学生さんたちの成長にも大変有効な手立てになりました。はじめは大丈夫かな、と心配したゼミ生の方もいましたが、出張授業を数年経験するうちにほとんど全員の方が、英語力も向上し、堂々と小学生の前で授業ができるよ

うになり、後輩の指導をするまでになりました。このような学生さんたちの姿を目にして、本当にその成長が嬉しかったことは忘れられません。ゼミ生の方たちの成長にもポートフォリオでのカンファレンスが特に大変効果がありました。ポートフォリオは確かに教員側の手間がとてまかかりますが、そのかけた手間以上の成果が上がるのがわかりました。さらに、小学生を対象とした場合についても、数年間、ポートフォリオの効果を実証的に確認しましたが、より手間がかかっても、やはり特にカンファレンスにおける自分の振り返りと組み合わせると教授ツールとしてのポートフォリオの効果が大きいと期待できることがわかりました。

さて、アジア諸国の中でも、外国語としての英語という日本と同じ環境にある中国、韓国、台湾の授業には大変関心いたしました。個人的な意見ですが、各国の政府がしっかり財政的にも手厚く支援していることもあり、日本の小学校英語は30年くらい遅れてしまった感があります。台湾には本学の提携校である国立嘉義大学の附属小学校にここ10年程毎年訪問し、毎回素晴らしい英語の授業を参観してきました。私の個人的な意見ですが、日本で小学校英語をしっかりと根付かせるためにはトップダウンの韓国方式が最善であると思っています。韓国では電子教材も含め国定教科書を作成し、小学校教員に120時間の研修を課すところから始まりましたが、この方式が日本には最適のような気がします。ただし、教材開発や教員研修に財政的な負担がとてま大きいので、残念ながら日本では韓国方式は難しいのかもしれませんが。その点、台湾の小学校英語教育を見ると、文部省からの指導はあるものの、教員側の自由度もある程度あり、日本がお手本にするにはよいのではないかと思います。以上のようなことを少なくともこの現実を現場の先生方にお伝えすることが私にできることであると考え、現場の先生方の教員免許の更新講習や中学校の英語の副免を取得できる認定講習の場において、特に台湾の小学校英語教育についてお話ししました。また、新潟県内の高校生を対象とした出張講座でも近年数回お話いたしました。現場の先生方であれ、高校生であれ、私の話を聞く前は日本の小学校英語は進んでいると思っていたという意見が多く、現実を知っていただくという面では少しはお役に立てたのではないかと考えています。

現在は特任教授として英語コースの在職中とほぼ同様に学部、大学院の授業をいくつか担当しています。ただし、国際交流センターの兼任を続けていますが、各種委員会の用務が免除になったこともあり、授業の準備も退職以前より時間をかけられるようになりました。大学院の講義は今年度限りの担当で、次年度からは新しいところに移ります。ただし、学部は次年度以降も担当していく予定ですので、自分でも楽しみながらできる限り一生懸命勤めていきたいと考えています。上越英語教育学会についても学会紀要の編集委員はまだ続けていますので、皆様がふるって論文を投稿してくださることを期待しています。

最後になりますが、本当にありがとうございました。これからもどうぞ宜しくお願い致します。

努力を積み重ねて

大学院1年 言語系コース（英語）

中村麻裕

大学院に入学し半年経った今、ようやく自分が教師になる姿を思い描けるようになってきました。学部を卒業した頃は、教師になるにはまだ自分が未熟すぎるように感じていて、こんな自分が本当に教師になってよいのだろうかという思いがあったのです。そんな自分に自信をつけるために、私はこの大学院で学ぶことを決意しました。

学部時代は、英語学の勉強とサッカーの練習に励む毎日でした。自分なりに努力して、勉強や部活に取り組みながら毎日充実した生活を送っていましたが、4年生のころ、教育実習で自分の教育についての知識と経験の圧倒的な少なさを実感しました。今の自分のまま教師になっても子供の前に自信を持って立つことができない、そう感じました。教師になりたいという同じ夢を持つ仲間たちは、学部時代に留学をして外国で英語を学んだり、英検で準一級や一級を取得するために勉強したりしていました。そんな姿を間近で見て、その彼女たちに追いつけるだけの努力をもっとしなければならぬと感じました。

今は、大学院で小学校英語教育のゼミに所属し、はじめて教育について真剣に学ぶ中で、毎日少しずつ成長している自分を感じることができます。今までの自分に足りていなかった部分を埋める作業をしているような感覚です。しかし、私は学部時代に過ごした時間を無駄だったとは全く思っていません。一生懸命取り組んだ英語学の勉強や、部活のサッカーも、私の人生にはなくてはならない経験でした。英語学の勉強では、卒業論文を通して、誰かから何かを教わるのではなく、自分で答えを見つけ出していくという学び方の魅力を知りました。所属していたサッカー部では、キャプテンという役割を担い、部員のモチベーションを保ちながら勝利という目標にどのように向かうべきか、どのような練習を行っていくべきか、時には悩んで逃げだしそうになりながらも、4年間サッカーを続けてきました。これらの経験は、今の私の自信となっていて、壁にぶち当たったときにも「あの時も頑張れたのだから、自分なら大丈夫」と乗り越えていくための原動力となっています。今度は大学院で、教育という今までとは違う方向からの学びを蓄積し、自分の自信に繋げていきたいのです。

大学院で学ぶということは、学部時代の仲間たちより少し遅れて、教師になるという夢を叶えるということです。遠回りをしている自分が情けないように感じることもあります。今の私にはまだ、大学院を卒業するころの自分が、自信を持って「今の自分なら大丈夫」と思っているかはわかりません。もしかしたら、本当に自分に満足できることは、どれだけ努力を続けてもこの先ないのかもしれない。しかし、自分なりに努力をしたという事実は、きっとこれからの自分を支えてくれる力になると思うのです。何十年も経った頃、少し遠回りした経験も、必ずよかったと思えると信じて、今は自分にできる精一杯の努力を少しずつ積み重ねていきたいと思っています。

教員になるために

大学院 1 年 言語系コース (英語)

桑原 一真

私は上越教育大学院に小学校の教員免許を取得する目的で入学しました。大学時代に小学生を対象にした様々なボランティア活動に参加し、そこで小学校の教師になることで子供たちの満ち溢れた可能性を広げてみたいと思ったことがきっかけです。大学院に進学することで、専門分野となる英語教育について学び、教員になった際にここで学んだ理論に基づいた実践ができる教師になりたいと思います。そして、英語の教科化が始まり、早期英語教育の声が挙がる一方、小学生の段階で英語嫌いになる子供が増えているということを知ります。確かな学力を養う中で英語嫌いな子供を英語が好きな子供になってもらうことが今大学院で日々勉強をする一つの目的です。

大学院生活が少しずつ経過していくたびに卒業後教員になる覚悟、不安など様々な思いが頭をよぎります。教育者となるために目的を持ち、目の前の一日一日を大事に過ごすことで不安を自信、そして確信に変えていきたいと思います。具体的には各教科に関する知識、その教育方法を学び、教員になった 1 年目を想定し、大学院という大きな準備期間を過ごしています。上越教育大学院では共に教員を目指す院生、現職派遣の先生など身近にも学ぶべき人たちが大勢います。また、英語コースだけでなく他のコースの人達と交流を幅広く持つことで自分の引き出しを増やしていきたいと思います。与えられた機会を最大限に生かし、多くの経験を私自身への学びへとつなげていきます。

今後大学院生活、そして教員になった後も常に学び続けることを大切にしたいと思います。自分自身の振り返り、同僚の方々からのアドバイス、子供たちの声に対し耳を傾け、日々成長していきたいと思います。私がここまで成長し続けてきたのはこれまで家族、友人、先生方など多くの人との出会いがあったからです。これから一人の人生を左右する立場となっていくため私自身人として大きく成長できる大学院生活にしたいと思います。「心が変われば行動が変わる 行動が変われば習慣が変わる 習慣が変われば人格が変わる 人格が変われば運命が変わる」というウィリアム・ジェームズという心理学者がいった言葉があります。一人の人生に関わる教育者になるために心を強く持ち、日常生活一つ一つの行動を意識し、関わる人たちを大切に、意識した行動を無意識にできるようにしていきたいと思います。

残りの大学院生活を実りある日々にするために、一日一日を大切に、与えられた環境、自分の周りにいる人達に感謝の気持ちを持ち過ごしていきたいと思います。

大学院生活と目標

大学院 1 年言語系コース(英語)

金井 治樹

大学院に入学して8ヶ月が経った。時の流れが早く感じる一方、今では自分なりのペースでここでの学生生活を上手く過ごしている。

私は上越教育大学に入学する前、社会人として働いていた。大学も英語とは無縁の経済学部でマクロ経済学を専攻していた。当時東日本大震災・日本経済低迷だったこともあり就職氷河期で就職活動に苦戦しており、たまたま内定を得ることができた地元の企業に就職した。しかし、働いている中で本当にこのままでいいのか疑問に湧いていた。私は海外からのお客様を中心に相手していく中で次第に英語をもっと活かせる仕事がしたいと思うようになった。同時に、アルバイト経験から子供を教育していくことに関わりたと思った。そこで、英語教師になりたいと結論に至り会社を退職しこの大学院を受験した。

大学院に合格し入学したがいくつか不安も残っていた。大学院は学部よりも高度の授業を行う為、英語関連の学部を出ていなく基礎知識もない状態についていけるのか。また、ストレートで入学する人が大半であり、年齢が離れている私は周りより上手く馴染めるかなど不安が頭の中をよぎっていた。しかし、英語コースの仲間は目標を高く持ち努力している人が多く優しい方々ばかりだった。中には自分と同じ境遇を経験した人もいた。英語コースは団結力が非常に強く仲間の輪を大切にするのでいい環境である。

一方で、私はロック音楽が好きで軽音部(MMS)に所属しベース担当でバンドを組んで定期的に演奏したりしている。院生は中々学部生と触れ合える機会がないが、サークル活動を通して学部生とコミュニケーションを通していく内に自分では気づけなかったことを教えてくれるのでこれからも人脈を広げつつ活動も頑張りたい。

授業は一から英語関連の基礎科目、教職科目や大学院の授業を受けなければならない大変ではあるがサポートしてくれる先生方ばかりで頑張れている。私は経済学部だったため英語教育や理論はさっぱり状態であるが、授業を受けるにつれ基礎が身につけているのが実感している。私は小学校入学直前までアメリカで5年間生活していた。この経験から異文化コミュニケーション分野に興味があり、研究テーマに向け日々論文を読み勉強している。修士論文も是非周りに認めてもらえるように頑張りたい。

自分はまだ英語能力が不十分すぎるので在学中に英検やTOEIC等個々に目標を立て、積極的に受験して英語力を高めていきたい。更に来年3月にイギリスに行ってイギリス英語・文化を経験することや海外フィールドスタディでオーストラリアにも行ってみたい。留学も機会があればしてみたいと考えている。自分の現状を変えるためにも是非これからは勉強にきちんと向き合い全力でやらなければならない。社会人になったら経験できないことを一つでも多く今のうちに経験し有意義な学生生活を過ごしたい。

研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授
中村洋一（平成4年度修了生）

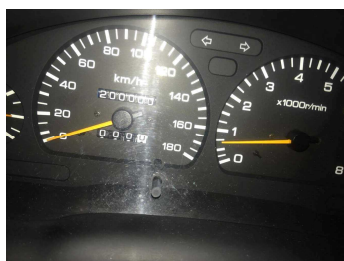
連載第6回

セキニンシャ、出てこいっ!

2017年は、1日4キロ、1週間で25キロ、1ヵ月で100キロ、1年間で1,200キロ以上を目標と決めて走ってきた。元旦マラソンから始め、2月のホノルル・キャンプ（学生引率の仕事の空き時間に...）、4月の長野マラソン、いくつかのハーフマラソン、10キロほどの短いレース数回を合わせて、10月19日に1,200キロを達成した。練習の励みになるので、カレンダーその日の走行距離を書き込んで累計している。一日に15キロを走るともあったし、悪天候で走れない日もあったけれど、わりと着実に距離を伸ばして、2ヵ月以上も早くに達成することができた。ただ、その後は、なんだか気が抜けてしまい、ほとんど走っていない。簡単に達成できてしまう目標は、努力の継続に負の影響があるのかもしれない。



ニンゲンが1,200キロを走り終えた次の月に、我が家の車の走行距離が20万キロに到達した。今年で大学を終え、Uターン就職を決めた三女が生まれた年に購入したので、22年間で20万キロだ。人生の1/3 お世話になってきたけれど、途中9年間の単身赴任があったので、あまり乗らない時期もあった。購入してすぐに、少しのオイル漏れがあっただけで、故障はほとんどなく、もちろん少しガタガタはしてきたけれど、今でも好調だ。実は、この車、昨今、無資格者完成検査の問題が発覚したメーカーのものである。このモンダイの発端は30数年以上前だということから、我が家の車の完成検査終了証もアヤシイ可能性がありそうだが、この車の20万キロ走行実績から見れば、報道されているような「日本の工業技術への不信」に直接的に結びつくのかどうか、少し考えてしまう。今回の完成検査について「クルマの品質がごく低かった60年前ならいざ知らず、今の自動車工学の水準のもとでは完全に形骸化している。法は守るべきだが、昔のまま法や規則を放置していたのも問題（自動車業界事情通）」という側面もある、という記事（井元）を読んだ。確かに「無資格者」の検査によって出荷されてしまう、という手続きには問題があるのかもしれないが、完成検査の



のような「日本の工業技術への不信」に直接的に結びつくのかどうか、少し考えてしまう。今回の完成検査について「クルマの品質がごく低かった60年前ならいざ知らず、今の自動車工学の水準のもとでは完全に形骸化している。法は守るべきだが、昔のまま法や規則を放置していたのも問題（自動車業界事情通）」という側面もある、という記事（井元）を読んだ。確かに「無資格者」の検査によって出荷されてしまう、という手続きには問題があるのかもしれないが、完成検査の

内容そのものを検討する必要があるのではないかと思います。つまり、資格のあるなしはともかくとして、その完成検査が、該当の車の「問題ない完成」を確実に検査し、「問題なし」と「問題あり」を識別できているのか、ということを検討する観点である。その識別ができていないとすれば、検査そのものの妥当性がなくなる。英語の能力に置き換えて考えれば、英語学習が「問題ない完成」に至っているかどうかを、妥当に測定して評価しているかという観点となる。「資格」があるなしに関わらず、英語学習の成果は、正確に測定・評価されるべきである。しかし、そもそも、英語学習の測定と評価における「資格者」ってなんだろう？「問題なし」と「問題あり」の境界線ってどうなっているんだろう？

同じ記事に、以前の燃費試験不正問題で「国の定めとは異なる方法で測定した」ことで、「企業の信用を著しく損なうと思われるが、改めて正しく測定したところカタログよりも良い燃費値が驚きの結果が出て、評判を下げなかったメーカー」のことも



る方
た。
とい
書か
る。

れていた。今、通勤には、このメーカーの軽自動車を使ってい

2万

片道40キロ、1日で80キロ、1ヵ月で2,000キロ弱、1年間に
2万
キロ以上走るのだから、燃費の問題は深刻だ。この車のカタログには、燃費26.6キロと書いてあ
った。だけど、実際の平均燃費はだいたい、16~17キロぐらいだ。通勤路で高速に乗るまでと降
りた後の渋滞や信号での停止なんかも考えれば、実際の燃費は大満足で、いい車に巡り合えたと
喜んでいる。しかし、国の定めによるよらないにかかわらず、カタログの燃費値と実際の平均燃
費が10キロほども違うというのは、どうなのかなあ、とも思う。現実離れた理想的な環境で測
定した数値よりも、「普通に使用する時は、だいたい平均16~17キロぐらいでしょうかねえ」と
いう情報の方が購入時の判断には重要な要素となるような気がする。国の定めによる測定の方
が良い結果になって評判を落とさなかったという現象も、よく考えれば、おかしくないかい、と
思う。英語の能力に置き換えて言えば、英語学習の成果を測定・評価する時、ある方法で測定・
評価すれば低い成績だけど、別の方法で測定・評価すれば、実は、もっと高いレベルですよな
どという判断をされるとしたら、学習者はどう感じるだろうか？そもそも、「定められた方法」つ
てどんなだろう？誰が、どのように「定める」のだろうか？それから、定められた方法、ある
いは独自の方法で、ある一定のレベルと判断された結果が、実際の英語能力と大きく異なってい
たら、どうするのだろうか？セキニンシャ出てこい！と叱られたら、誰が出てきて、なんて言うん
だろうか？この文を書き始めてから、さらに複数の企業で、データ改ざんの問題が発覚し、セキ
ニンシャが記者会見で身体を折り曲げて謝罪している。闇は深い。せっかく正確に測定したデー
タの評価を捻じ曲げることで、何か利益があるのだろうか？報道を追いかけてみて、もしかした
ら基準値が必要のないくらい厳しすぎるのではないかと、とも思い始めている。そんなに高い水準
でなくても安全性には問題ないといった考えが、もしあるとしたら、基準値そのものが適切な
のか検討する必要があるだろう。「これ以下は、絶対に受け入れられない不良品である」というこ
をはっきり、くっきり定める必要があるのではないかと、思う。

さて、英語教育である。大学入学者選抜のありかたについては、多くの検討がなされ、大きな
動きが始まりつつある。

文部科学省は11月8日、大学入学者選抜における資格・検定試験の活用を支援するための仕組

みとして「大学入試英語成績提供システム(成績提供システム)」を設け、平成 29 年 11 月 1 日付で、大学入試センター理事長裁定による、「大学入試英語成績提供システム参加要件」と「大学入試英語成績提供システム運営要項」を公表した (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/index.htm)。

参加要件は A4 で 4 枚と、比較的短い文書であるが、重要な要件が示されている。資格・検定試験実施主体に関する要件では、拠点を日本国内に常設している継続性のある組織・経営体制を持つ法人で、債務超過がなく、必要な資力を有していることと、個人情報に関するセキュリティ管理体制を要求している。

資格・検定試験に関する要件としては、2 年以上広く実施されている実績と高校生の受検実績や大学入学者選抜に活用された実績をまずあげている。さらに、英語 4 技能の全てを極端な偏りなく評価、技能別成績の提供可能、高等学校学習指導要領との整合性、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) (ヨーロッパ言語共通参照枠) との対応関係を検証していく体制を要件としている。実施要件については、毎年度 4 月から 12 月までの間に複数回の試験を実施、毎年度全都道府県で実施、適切な検定料、障害等のある受検生への合理的配慮や、試験監督及び採点の公平性・公正性の確保、採点の質確保、不正・情報流出等の防止策や不測の事態発生時の対処方策をあげている。データの管理・提供に関しては、センターが発行する ID、成績提供の時期、スコア(バンド表示も含む)、CEFR の段階別成績表示、合否をオンラインでやり取りするシステムを要件としている。情報公開、第三者評価等の要件では、信頼性・妥当性等について、第三者機関による評価や自己評価、そして情報公表を求めている。

再び車の燃費不正問題に関する記事に戻ると「本来はイコールコンディションで審査をすべき走行抵抗(燃費を計測するうえでの重要な項目)の計測をメーカー任せにしていたのが不正を許す要因になっていた」とある。大学入学者選抜試験において、唯一「外部試験の活用」をする科目である英語のテストについて、「イコールコンディション」をどのように担保していくのかが大きな課題である。複数のテストから得られるデータとしての「スコア(バンド表示も含む)」の公平性・公正性、CEFR との対応関係は、言葉にすれば短く表現できるものではあるが、その解決に向けた方法論の追求は大きく立ちはだかる課題のひとつである。入学試験のように high stake で利害関係の強いテストにおいては、慎重な検討を重ねて事を進めなくてはならない。

新しい学習指導要領による指導に向けての動きも活発になってきた。学校の先生方の働き方の見直しと相反するのではないかとの懸念も抱いてしまうほど、多岐にわたる現場での対応が要求されている。

小学校での英語教育では、具体的な教材が発表されつつあり、酒井他編 (2017) のような書籍もリリースされた。2013 年に発表された British Council の、世界各国の小学校英語教育に関する詳細な調査報告 (Rixson, 2013, pp. 47-48) の Conclusions は、the age at which the teaching of English begins、teacher supply and teacher quality、assessment issues、including the setting of target levels、transition between different levels of schooling、relations between private and public sectors を“The major trends and issues in the teaching of English to primary school aged children in the 21st century”としてあげている。いずれの指摘も、日本における小学校での英語教育開始にとって、耳の痛い課題である。11 月 15 日付けの地元紙、信濃毎日新聞の教育欄で「小学校 5・6 年生の英語教科化 20 年度スタート」という記事を読んだ。文部科学省の直山木綿子教科書調査官と、信州大学の酒井

英樹先生お二人のお考えが紹介されている中に、「語学はともに勉強していくもの」「先生も一緒に学んでもらう」とあった。小学校での英語教育推進を任された先生方の研修会などに、何度かお邪魔して、一生懸命に取り組んでおられる姿に触れ、他の校務の合間に熱心に勉強されていることを知った。やっぱり先生は「教える」という責任感が強いなあ、とも思った。この新聞記事が言うように、「ともに学ぶ」ことへの心理的な抵抗感をぬぐい去るのは、それほど簡単なことではないような気がする。しかし、変わるべきは小学校の英語教育だけではないことを肝に銘じて、関係教育機関の連携を密にし、よりよい方向を追求していかなければならない。まずは、小学校で児童たちは何を学ぶのか、それが中学校やそれ以降の英語教育 (あるいは、教育活動全般) にどう繋がっていくのかを考えながら、小学校英語教育の「ミニマム・エッセンシャルズ」を、何度も何度も検討していくことが必要不可欠である。

アクティブ・ラーニングの研修に関わることも多くなってきて、泥縄的かつ遅ればせで、恥ずかしながらであるが、夏から秋にかけて *Active Learning* に関する本を読んでみた (Baepler etc., 2016)。 *How do I cover all the content?* という問いに “Less is more when [students] have a deeper understanding (p. 57)”、 *How do I manage class flow?* という問いに “Get ready to not know everything (p. 58)” と発言した実践経験者の助言に、いろいろな意味でホッとした。文科省が「主体的・対話的な深い学び (いわゆる「アクティブ・ラーニング」...) 」と、「アクティブ・ラーニング」をカッコの中に入れた理由も、うすうす分かったような気がした。こちらも、先生が「教える」というベクトルから、「児童・生徒が学ぶ」ことを促進するというベクトルへの転換、特に「教える」側の心理的転換が、ひとつの鍵となるのではないかと考え始めている。

もうひとつ、目下、平成 31 年度から実施される新教員免許法での教職課程運営への対応で、教職課程再課程認定の書類仕事に取りかかっている。「教職課程コアカリキュラム」、「中・高等学校教員養成課程外国語 (英語) コアカリキュラム」といった文書を、老眼鏡越しに必死に読んでいます。コアカリキュラムの最終決定がなかなか出ないことをいいことに先延ばししてきたが、いよいよお尻に火がついてきた。ため息の連続の中、弱々しく「セキニンシャ出てこい ...」などとつぶやいてみるが、良く考えたら、この仕事の職場でのセキニンシャは自分だった ...。

参考文献

- Baepler, P., J. D. Walker., D. C. Brooks., K. Saichae. & C. I. Petersen. (2016). *A guide to teaching in the active learning classroom: history, research, and practice.* Stylus.
- Rixon, S. (2013). British Council survey of policy and practice in primary English language teaching worldwide. (<https://www.teachingenglish.org.uk/article/british-council-survey-policy-practice-primary-english-language-teaching-worldwide>).
日本語訳：「世界の小学校英語教育についての政策と実践」(<https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/ees-report-primaryenglishlanguageteaching-jp.pdf>).
- 井元康一郎. (2017). 「無資格検査問題」が起こるべくして起きた意外な背景. <http://diamond.jp/articles/-/145363?page=5>. 2017.10.12
- 酒井英樹・滝沢雄一・亙陽一 編. (2017). 『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシ

ャルズ』. 三省堂.

信濃毎日新聞 2017年11月15日 11面. 「小学校5・6年生の英語教科化20年度スタート」.
文部科学省. (2017). 「大学入試英語成績提供システム参加要件」・「大学入試英語成績提供システム運営要項」 (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/index.htm).

編集後記

上越教育大学大学院に内地留学していた2年間、ご指導をいただいた先生方も次々と退職されてしまい、北條礼子先生もご定年を迎えられたことに時の流れの速さを感じています。修論のテーマ設定に悩み続け、出口の見えない長いトンネルに入ってしまった時、一筋の光を見出すきっかけを作ってくださったのが北條先生でした。定年近しとのお話をうかがってから、今後、上越をお訪ねしても北條先生とはなかなかお目にかかれなくなるのかなあと寂しさを感じておりました。巻頭記事では特任教授として引き続きご活躍されているご様子がかがえします。今後とも、上越教育大学の学生と本学会の活性化のためにご尽力をお願いいたします。

最後に、今回の発行は編集担当の見通しの甘さにより、通常よりも遅れが生じてしまいました。そのため、院生の方々の学年は原稿をいただいた当時のものです。入学後の所感等、学年と関係がある内容であるため、学年を変更せずそのまま掲載させていただきましたのでお含みおきください。皆様からは、昨年うちに原稿をいただきながら発行までの時間がかかりました点、心よりお詫び申し上げます。

(編集委員 H.I.)



2018年5月14日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子 (上越教育大学)

野地美幸 (上越教育大学)

飯島博之 (埼玉県立大学)
